

# 親身な指導をめざして

培いたい学生との信頼感



村越 洋子

大月短期大学

はじめに  
地図帳をひろげる。あつた！針の穴ほど小さい大月の地点が。私は中央本線を下って、大月駅に降り立つ。昨日まで、新宿の京王プラザホテル前が職場だった私に、わびしさが急襲する。そこから五分の所にある大月短期大学に、その時、こんなに長く勤務するとは思ってもみなかった。今から二十四年前のことである。

以来、心理学、青年心理学、教育心理学、学習心理学、相談心理学と受け持ち、心理学の雑貨屋商売がはじまる。なにしろ、今でも心理学の教員は私ひとりなのでしかたのないこと。現在は、カリキュラムの改革もあつて、心理学、

青年文化論、教育心理学、教育方法論、学校カウンセリグ、教養演習（文章指導）、総合科目（女性学）を担当している。こう並べて書いてみると、いろいろなことをやっているのだと改めて思う。経営規模の微小な経済の単科短期大学において、研究時間とは結局、絵に描いた餅。専任教員十六名はフルに働き続けなければならない。やっと一年間が終わった、さて来年は、と一年単位で過ぎていく。振りかえってみると、授業と会議等の連続の二十四年間だった。

そんな中で魅力だったことは、個室の研究室がもてたこ

とと、学生の人数が一年生二百人、全学で四百人という少人数の学校だったことである。公立のメリットと大切にしていきたい。このくらいの規模だと、教員も学生も疎外されることなく、学校づくり、授業づくりに取り組みやすい。数少ない必須科目も昨年から二クラスに分け、まだ一クラス百人という課題を残しているが。

## 大雪の日

私の受け持った心理学は女子学生に人気のある科目で（共学だが八割が女子）ほぼ全員が受講していたので、クラスは二つに分け（一クラス百人余）、同じ内容を二回授業することになった。初めの頃、奇妙なことに気づいた。全く同じ内容なのに、二クラスの反応がちがうのだ。さっきのクラスはここで笑ったのに、このクラスではしんとしてしらけている。さっきのクラス



むらこし・ようこ●一九四三年東京都生まれ●専攻は心理学（発達心理学）●高校までの教育が受験や管理を意識しすぎて、ひとりひとりの主体性を育ててきてないので、大学でこそそれを育てたい。●尾崎豊の生と死―青年心理学的アプローチ―（大月短大論集二四号一九九三年）●尾崎豊の存在―青年期における社会的意義―（大月短大論集二五号一九九四年）●フランス子ども事情―夫婦づれ留学記―（白石書店一九八三年）●なんだ坂こんな坂子どもは発達と家庭生活―（大月書店一九八五年）●ホクのカバンに連絡帳―七口歳―一歳二歳の家庭と保育園の生活―（大月書店一九八六年）

では教室中はりつめてきているのに、このクラスはなんとなく、ざわざわしている。さっきのクラスは学生ひとりひとりが能動的に実験にとりくんではいるのに、このクラスの学生はやる気がないみたい。二クラスのうち初めに授業するクラスはうまくいくのに、どうも後のクラスの授業は砂をかむような、後味の悪い思いが段々とつのつていった。

ある大雪の日、車も動かず、電車を四つ乗り換えて、二人の子どもを保育園に送って、片道、三時間半もかけて来たというのに、この後のクラスの授業中のうるささ。（学生の八割は学校の周辺に下宿している）こんな大雪の日でも休まず授業しているというのに……。なぜ、そんなにうるさいの！口では、ノートをみながら講義しているのに、心の中ではこんな思いがとぐるを巻き始め、そしてそれがついに爆発してしまった。やりきれなさがかみあげて絶句。声をだせば、今にも泣き出しそう。私は懸命に堪えて堪えて、しばらく、教壇の上で棒立ちしていた。学生が私の異変に気づき、クラスは水をうったように、しんとだまりこくり、私を凝視している。その後はもう授業にならない。なんとかつじつまを合わせて、早めにきりあげた。

研究室で声を潜めて泣いた。悔しさと自信喪失と嫌悪感にさいなまれながら。このことがあってから、私は大学の

授業実践について考えるようになった。

### 一人芝居の魅力

なぜ同じ内容なのに反応がちがうのか。次第にわかってきたことは、伝える内容は同じでも伝え方が違っていたのだ。初めのクラスではその日の授業内容に見合った導入の話をし、(学生はこれを結構楽しみしていて、ここから授業体勢ができていく)いつの間にか、本題へと導いているのに、後のクラスでは同じ話を二度するのは気がひけて、なんとなく、はしょっている。気分転換のジョークも同じ理由でボツ。説明の例題も半分ぐらいに減っている。

後のクラスの授業は内容が同じと自分では思っていたが、随分と骨っぽい、具体性に欠けた、能面のようにのっぺらぼうな授業になっていた。これではおもしろいはずがない。ざわざわと、時にはおしゃべりするの当たり前。それに気づいてから、私は堂々と、導入の話も用意したジョークも説明の例題も、二番煎じと恥じずに、後のクラスにもするようになった。二度めの授業で同じ話は疲れる、と億劫がってはいけない。二つのクラスは学生が異なるのだから。

さて、こうなると様子が逆になってくる。初めのクラスがリハーサル、後のクラスが本番のように。さつきはこの

話は反応があまりなかったから、こつちの話と入れ換えよう、ここの部分は蛇足、思い切って削って。そうだ、説明にこの話題も加えよう、そして、リハーサルのみなので、自信をもって堂々と……次第に後のクラスの授業が楽しみなってきた。こつこつと教室に近づく廊下は舞台の袖。私は今、上手から舞台に近づく。ドアを開ける。あ、今、幕が上がったのだ。あんなに嫌だった学生の一言の視線も気にならない。私は教壇へ上がる。今、一人芝居が始まるうとしていく。

「備えあれば憂いなし」とはよくいったもので、授業の準備が納得いくまでできている時は、学生に早く伝えたいとまで思っていることに気づいたのもこの頃だった。マイクの音量、カーテンと窓による光と風の心地よい具合、適宜な板書、必要なだけのプリント、教壇をはなれての机間循環、時折りのゼスチュアール、なによりも学生を笑わせたかった。その頃、喜劇を見たり、落語をきいたり、パントマイムの講習があると知れば受講してみたり。そして、なによりも研修に参加したのは、小・中学校の授業実践だった。

### 学生の生き方

役だっているのか

「一年間、心理学の講義を受けたことは、非常によかったと思います。必修も含めて、十八科目の講義の中

で、一番好きな講義でした。先生の講義は本当に毎回毎回楽しくて、共感するところもありました。……」毎年、授業の最後に必ずとっていた授業の感想文。その中に、このような「ああ、学生に何かが伝わっている。来年もがんばろう」と励まされる感想文が増えるにつれて、授業はその場が楽しくおもしろければいいのだらうか、それ以上の、もっと深みのある何か別な感想があってもいいのに、と漠然と、とりとめのない疑問を持つようになった。そうよ、授業は落語じゃあるまいし、ショーでもないし。(服のセンスがいいとか、今日は何を着てくるのか楽しみだった、などの感想もあったのだ)

そんなとらえどころのない、曖昧な疑問に悩まされていたある年の心理学の授業の最後の一ヶ月、試行錯誤的に「生き方」に関するテーマでのバズ・セツションを三回連続して行なった時のこと。二回めの授業をほんのささいな理由で休んでしまった。今まで、休講していかないのだから、一回ぐらい休んでもかまうもんか。大胆だった。が、翌日、大学の教務課に行った時、「先生、学生が何人も抗議にきましたよ。先生の休んだ理由をききに」と。特に男子学生が残念がっていました、と。

— すぐ、その男子学生たちと会って、詫びると、「生き方

について普段、全然、話し合うチャンスがない。だから授業を楽しみに期待していたんだ」とのこと。私は、「そうか、生き方か。学生は自分の生き方に役立つ授業は期待するんだ」と教えられた思いだった。

翌年のシラバスから「学生の生き方に役立つ」ことを基準に授業内容を大幅に見直すきっかけになった。

教師は

オルガナイザー？

自分の大学時代を振り返ってみると、今の私の生き方にかつての大学の授業が全く結びついていない。0HPを使用した八百人の受講者の中での、思想のない社会学の授業は、出席と試験のために嫌々出席していたし、毎年、全く、同じノートを棒読みする授業は、なんでわざわざ、学校に聞きにこなくちゃいけないのか、コピーしちゃえばいいのにと、思い出しても、よかつた授業はひとつもない。

今の私の生き方に結びつくものは、婦人問題研究会だったり、地域のひとの保育所づくり運動だったり、女子学生の就職問題を考える活動だったりする。そして、その中で、今でもありありと思いつくことができるほど、強烈な刺激は、女子学生の会の講演で話してもらった先輩の生々しい体験談だった。「卒業後、教師になり、結婚し、出産した

が、生まれた子どもが未熟児だったので、教師を辞めた。しばらくして、再就職しようとしたが、全く、採用されない。どんなことがあっても、仕事をやめてはいけない。日本の社会は、女性が働くことに大変厳しい」こんな内容だった。

学生時代はまさに温室であり、現実の社会のことを自分の生々しい体験として触れるチャンスに乏しい。確かに、理論や情報としては授業を通して伝えられる。が、そのレベルでは自分の「生き方」に突き刺さりにくい。じゃあ、自分はどんな生き方をしようか、と導火線に火がつかないのだ。ところが、学生の目の前で、現実を生々しく背負った人の話は、いとも簡単に学生の「生き方」を考える導火線に火をつけてしまう。一度、火がつくと後は、自分の生き方に必要な情報を学生の方から求めてくる。そこに大学の授業が意味をもってくるのではないか。

こんな経験から、総合科目の「女性学」では、理論とうまくマッチさせて、女性の弁護士に現実の社会でおきているケースの話をしてもらったり、現に今、働いている職場の女性に、子育てをしながら働いている体験を語ってもらっている。大好評である。

認識を  
ゆさぶりたい  
心理学の授業でも毎年、意味のある生き方をしてる人に必ず一人は、話をしてもらっている。

例 同じクラスの留学生たちの体験談をきいて

この講義では、よくありがちな、先生の一方的な講義とは違い、ビデオの鑑賞や実験などが豊富で、体験的に勉強していくことができました。特に、後期に入っている「人間の性と生き方を考える」では、グループ討論などの機会もあり、これからの私たちの「生き方」を考えるととてもいいチャンスを与えていただきました。

そして、本日の留学生の方たちのスピーチも、また、違った視点からの人生論を聞くことができ、これからの原動力となりそうです。

例 盲導犬をつれた全盲の大学院生の体験談をきいて

心理学の最後の授業は私にとって忘れられない授業です。伊藤精英さんと会い、話を聞き、私は人間の生き方の一つを学びました。そして、励まされ、勇気づけられました。

というのも、私は普通の女の子より背が高く、一時期すごく悩みました。小学校六年生あたりから中学生にかけて、男子から「ジャンボ」とからかわれ、街を歩けば、知らないおじさん、おばさんに「でかい女だなあ」と言われ、じろじろ見られ、やるせない気持ちでした。現在でも周囲の人が私を見る目は変わりません。

—略—伊藤さんは言いました。「盲導犬をつけて歩くのは自分が盲目であることを周りに知らせるためです。盲目の人のことを周囲の人々にもっと理解してほしいからです。」と。私はその言葉に圧倒されました。私が盲目だったら、自分が盲目であることを隠すでしょう。しかし、伊藤さんはそれを自らアピールしているのです。私は周りの人と違った長身を欠点だと思ひ込んでいました。でも、それは考え方によっては良い点となるのです。私は周りの人の目を気にせず強くなれたような気がします。また、伊藤さんの楽しそうに話す声に心打たれました。来年も、是非、伊藤さんの話を後輩たちに聞かせてあげて下さい。きつと一人一人の心に、何か響くものがあるはずですよ。

### 学習仲間の

### 必要性

「先生の授業はすごくいい。」「なにがいの。」「友達の意見がききて、ああ、そうか、そんな考えもあるのかって、とても勉強になるから。」

コンパの席で、車中で、気を許した学生は教員の授業をよく比較する。「他の先生の授業は一方的で、ただ、ノートをとるだけ。高校とおんなじ。なんのために大学にきたのかとはらがつたつてくる。つまんなくてしゃべると、静かにしろ、教室から出ていけ、と怒るだけ。レポートも全然興味を持ってない課題で、辞書ををかたつぱしから引き、本を写し、自分のない力をふりしぼって書かなければならない。試験だって、自分の勉強したところができれば、いい点がつくし、勉強していないところができれば、できないにきまつている。そんな一枚の紙で私たちの能力が本当にかかわるのかしら。」

まもなく二一世紀。高度情報通信システムが各家庭に普及し、「在宅で学習できる」時代の中の学校って何だろう。もし、情報を収集する所であれば、在宅でできるので学校は要らない。学生の人格陶冶の場であれば、在宅だけでは不十分である。在宅とちがって学校には教師がいて学生が複数いる。とすれば、学校での教育方法は、この複数

の学生を組み込んだところに大きな特徴があるのではないか。

私は二百人の大教室での講義でも必ず、講義の合間に必要に応じて、バズ・セッションを入れる。講義と関連したテーマで自分と同じ時代を生きる仲間と語り合うことは、共感したり反発したり、刺激を受けたり刺激したり、で教師とはまたちがった認識の深め方をしていく。また、同じグループだったことがきっかけで、大切な友だちもできていく。

青年期の真ただ中にいる学生、その学生を教育する大学においては、従来の古典的な、高き教壇から、研究成果を講義し、学生はただそれを拝聴する「一方的教師主導型」の教育方法は、現状では学生のニーズと全くずれている。

大学以外の場で情報が手に入る現在、大学に情報だけ求めてくる学生は少ない。むしろ、青年期の課題である「自分でくり・生き方がし」にある。そして、その糸口が少しでも見えてきた時に、大学の情報も学生にとって意味をもってくるのではないだろうか。

### 教養演習の使命

その目的を一番果たせるのは、まず新入生対象の教養演習である。大学設置基準第二

五条「授業の方法」の中で「授業は、講義、

演習、実験、実習若しくは実技のいずれかにより又はこれらの併用により行うものとする。」とある。条件さえ整えば、演習は講義よりも大学の教育方法の中心をなしてもいいのだ。更に、実験や実習は極端に言えば、一人でもできる。が、演習は一人ではできない。そこには自分以外の人がいなければならぬ。人の前で演じて学んでいくのだ。仲間を必要とする青年期の教育方法にびつたりではないか。

私の大学では、新入生二百人にたいして、七つの教養演習が開講されている。開講当時は、この科目のもつ意義から必修だったが、学生の希望どおりの適正なクラス編成ができず、現在は選択で、演習の目標が果たしやすいよう一クラスの上限を二十人にしている。そして、内容は各担当の自由裁量に任されている。

私の教養演習の題目は「文章指導」だ。論文指導ではない。「文は人なり」にかぎりなく近づくことを目的としている。したがって、書かれた文章に赤ペンを入れる添削指導ではなく、書き手の感性や認識力を、すぐれた教材や仲間との活動の経験によって磨いていく。このことを通してその人(各学生)なりの文章を上手にしていく、というものだ。

### 前期

①自己紹介等の簡単なクラスづくりの後、まずだれでも

書ける「手紙文」からはいる。「一番大切に思っている人に大学生活が始まった近況報告」という課題で。

これは全員に発表しない。私だけが読むことわかって。これだとだれでも書ける内容なので、滑りだしとしては上々である。

②「文は人なり」にうってつけの感想文にいいよチャレンジ。ここで大事なことは、感想を書きたくなくなるような教材の選択である。まず、学生の好きな映画で、感動させ、どの学生も自分の問題として把握出来るものでなければならぬ。

例えば

a、家族Ⅱ『息子』

b、結婚Ⅱ『ステラ』

c、愛Ⅱ『街の灯』

d、平和Ⅱ『七月四日に生まれて』など。

何を見るかは、当日まで伏せて、期待させ、先入観なしで鑑賞する。翌週、グループで感想を言い合い、感想文の執筆。更に翌週、感想文全部コピーし、評価し合う。これを前述した四つのテーマにそって四回（一回に三週必要）繰り返ししていく。この活動のなかで、かなり、自分の考えなるものが芽生えてくる。

後期

③やや長文のレポートに挑戦。自分の考えをもっともつとどしたい段階で、今度は、自分の情感をやや抑えて、客観的な表現としてのレポートにとりくんでみる。これも教材がものをいう。自分から調べたくなるようなものの方がいい。そして、人物で、学生ひとりひとりの生き方に役立つものがいい。

今年は学生にチャップリンに出会ってほしくてテーマを「チャップリンの生涯と彼の映画」にする。初めは、義理でみていたチャップリンの映画。彼の生い立ちを調べるにつれ、次第にその作品のもつ社会的な意義がわかるにつれ、夢中になってくる。

参考映画

a、『街の灯』（すでに前期で導入としても見ている）

b、『キッド』

c、『独裁者』 時間の余裕があれば『モダンタイムス』も。

全員のレポートが仕上がると、全員で評価しあう。自分の作品だけでなく、演習全員の作品に触れることにより、



みんなチャップリン通になり、もつと彼について学び、作品をみたくなってくる。演習では、各学生にこの「もつと学びたくなるきっかけ」を全員で作っていくことだと考えている。

④ チームを作り、「リレー短編小説」で総仕上げ。一人では絶対にできない演習ならではの活動。もう文章は抵抗なく書けるようになっていて、今度は仲間の力を借りて、もつともつと創造力を練り、構成力を高め、表現力を深めるために、グループで短編小説を書くのだ。

課題は「映画『クレイマー、クレイマー』をみて、その後どうなったか」だったり、「映画『息子』をみて、その後どうなったか」だったり。(年によって希望をとる)この課題を遂行するためには、まずチームづくりがなにより大事。で、「同じ釜の飯を食う」活動が必要になってくる。だから、この教養演習にとつてゼミ合宿は欠かせない要因なのだ。

大事にした  
ゼミ合宿

金を使って、わざわざ行くゼミ合宿。大学の教室でできることをするなら、意味がない。大学でできないことをしなくて

は意味がない。そこで、私たちは大いにゼミ仲間として親睦をはかる。特に、チームで「リレー短編小説」なるものに挑むためには、強力なチームワークをつくらねばならない。そして、晴天のうちに、広い、周囲に人家のないキャンプファイア場へと飛び出す。そして、これから小説をつくるチームに別れて競い合う。

① 大なわとび

② 二人三脚ならぬ五人六脚(四つのグループに別れて五人ずつ)

③ 目隠しして、ご縁(五円だまの紐を引き抜く)がありますように

④ ストロウで輪ゴム五本送り

⑤ しりとり歌合戦

初めは、童心にかえった自分にとまどいながらも、最後のゲームの頃には、本心になり、チームのためにがんばっている。僅かな時間だけれど、その、できあがったチームワークを単位に小説づくりに入る。どういう小説をつくるか、という話し合いの中で、いやがおうでも自分の思っていること考えていることが滲みでてくる。それを互いに、話し合うことで刺激し合っている。

ストーリーができる各々が執筆する分担の話し合い。

執筆にはいる。できたら自分の前後の人との微調整。全体の調整。個人とチーム全体での何回ものかわりあい。しだいに、個人ひとりでは考えられないほどのレベルアップがなされてくる。そして、それぞれのチームの作品の最後の発表会の段階になって、お互いのチームの作品のレベルの高さに驚き合う。その時、一人では感じることでできない達成感をゼミ全体で共感し合う。

### ゼミ合宿に参加した学生の感想

「大学生を感じた時」

学生として四月からゼミがスタートした。文章指導という形態で。今までの学内での講義でも自由な空間として受けてきたのだが、今回は合宿という形でゼミに参加した。

はじめ、単に今後の課題である短編小説を書く時に向けての、仲間意識を作る、いわば泊まり込みのコンパのようなものしか意識していなかった。しかし、実際には、私の考えていたものとは大きくことなるものとなった。私達の生活の自由というものは完全に保たれた上に、非常に内容の濃いものが展開されていることに気付いた。それは、先生が私達に考えさせるよう

なものを提供してくれて、私たち自身が、それについて考えを発展させるといったものだったからだ。言うならば私達自身が学びあっていると感ずることが出来たからだ。

かつて、何を学ぶために、大学というところに来ていたのだらうと、考えさせられるような講義をいくつも受け、大学なんて先生が学生の上に立ち押さえつけている。先生の言っていることが全てだ、というような講義の展開されている大学に不満を抱いていた。しかし、この合宿でやつと、これこそ大学、私は今、学んでいるんだということに気付いた。私達が考え、発言し合ううちに、今まで気づけなかった個人と言うものが見えてきた。

文章指導のゼミ合宿という形ではあったが、それ以上に私自身得ることのできた大きなものに対し、今、非常に満足している。私にとってこの体験は、こうして合宿の感想を書いている今も、興奮として私の体の中で、暴れているのだ。大学生を感じた瞬間を持てた喜びと共に。

講義こそ大学らしい教育方法と信じている大方のおと

な。それは多人数による便宜的な方法であって、決して最良とは思えない。つまり、「学び合う」ための学習仲間が介在しないからだ。学生にとって、大学らしさを「学び合っている」ことだとしたら、もつとゼミを、とくに新入生対象の教養演習を位置付けていきたい。

「私にとってのこのゼミは、文章を上達させる場であり、同時に人生について考える場でもあった。」の学生の感想を真摯に受けとめたい。

### 親身な指導を

#### 目指して

二十八歳で初めて教壇にたった時、学生との年齢差は十歳、年の離れたおねいさんというところ。それ以前の仕事がカウンセラーだったから、初めから学生が怖いと一度も思ったことはなかった。でも、全部の学生に関心をもつ（もちたいと思う）ことは、まだできなかった。

ある時、総ての学生に、かすかないとおしさを感じている自分がいた。ちようど、学生と自分の子どもが同年齢の時だった。どの学生と話していても、自分の子どもとオーバラップさせている。学生の気持ちを包容している。そして、ああ、この学生も今、親元を離れて自立の旅をしている。私は心の奥でさりげなく、励ましのエールをおくっている。特に、四、五月は、早く友だちができますように

と祈っている。ポツンと一人で窓辺にたたずんでいる学生をみると、ゼミをとっていますように願ってしまふ。

実際に、学生の親になることはできないけれど、親身な指導をめざすことによつて、学生との信頼感をもつと深めたいと思う。それは自分の担当する授業だけ考えるのではなく、学生の立場にたつて、学校を作り変える力になるからである。

「先生だったら、私の考えを解ってくれる。」という学生の声は教育実践の模索の原動力になっている。

### 学生のための

#### 教育改革を

以上、私の教育実践史を恐縮しながらたぐってきた。個人的作業だった。が、今、教育改革の一環として、学校全体で教育実践の改善に取り組もうとしている。私の勤務する短大もその一つである。

一九九五年の秋に教育改革委員会が結成され（今までに何度作られたことか）カリキュラムの検討、施設設備の改善、事務組織の見直し、そして、授業をめぐる問題を考えていくことになった。その授業に関して評価したいのは、教授会の賛同をへて、全学生のアンケート調査が実現できたことである。教員の休講数、実質的授業時間、私語の有無、エスケープの有無、受講動機、授業の理解度、授業の

満足度、授業の努力度、授業の学力獲得度など、教員にとっては辛辣な、しかし、授業を見直すには必須な学生アンケートだった。さらに、全教員の授業にかんするヒアリングもおこなわれ、今まで個人作業だった教育実践が教育改革の一環として学校ぐるみでとりくまれようとしている。

より充実したカリキュラムを創造するための参考に、卒業生へのアンケートや各事業所へのアンケートも実施した。そのカリキュラムに基づいて、学生に役立つ教育実践の研究会も学内でもてるようになった。経済学、情報処理学、外国語教育、一般教育、そして高校までのカリキュラムとの関連で、近未来社会論からも見据えて。私に課せられたその研究会の課題は「大学における授業方法の改善策――青年期という発達段階をふまえて」である。

今度こそ、学生のための教育改革が望めそうだ。ようやく、緒についた感じがする。

